C－66 沖縄近世後半、王、士分の日常着について

琉球大教育　仲井真治子

目的　1．先の報告（沖縄近世王・士分の礼服）と同じ。2．先の報告で礼服は中国の影響が多いという結果を得た。儀礼的な服飾と日常的な服飾には外来文化と琉球独自な文化がどのように表われているかを解明する。

方法　文献調査は琉球大学付属図書館郷土史料室、沖縄県立史料編集所及び沖縄県立図書館別館東恩納文庫で行った。その他沖縄県立博物館所蔵資料の調査、古老及び専門家を対象に聞き取り調査を行った。

結果　王は屋外着として明帝から賜られたと考える円領沙袍（夏）と円領緞袍（冬）を着用、屋内では朝衣を着用した。王子以下士分男子は礼服の朝衣と形態は類似し。それより丈短かな長着に挟帯をして屋内、屋外で着用した。女子は近世後半に2段階の流行があった。19世紀半ばまでは屋内では襦衣・裙を、屋外ではこれにウッチャキーを重ねた。19世紀半ば頃から夏の屋内着はウシンチーに替り、屋外ではこれにウッチャキーを重ねた。冬は長着に細帯を締めウッチャキーを重ねた。襯衣についてはウシンチーのみ明らかになった。士分のウシンチーの襯衣は襦袢と袴であるが、王妃、王女はこの上に更にシルヂンを重ねてから表衣を着た。その他防寒着として、男子のドゥブク、唐フィーター、女子にフィーターがあった。日常服でも王の場合は中国的色彩が濃い。王以外の男女の日常服は日本の影響を受けながらも琉球独自の服飾文化が多くみられる。枝葉的要素に東南アジアの影響がみられるのではないかと推論する。女子服に袴があったことはこの時代の日本服飾文化と異る独特な現象である。